小学校

平成13年度

教育研究員研究報告書

道　　徳

東京都教職員研修センター

平成13年度

教育研究員名簿

第１分科会

地区名	学校名	氏名
世田谷	給田	○坂江律子
中野	中野神明	□武田淳
杉並	和泉	秋山峰代
練馬	関町北	宮川正子
武蔵野	第三	松井彩
多摩	東落合	筒井泰行

第３分科会

地区名	学校名	氏名
中央	有馬	□川瀬光子
江東	枝川	◎長町正弘
北	神谷	押見尚美
足立	桜花	古谷眞理子
葛飾	道上	世取山哲哉
江戸川	新田	小島倫子

第２分科会

地区名	学校名	氏名
大田	東調布一	高野寿子
大田	道塚	青木文理
渋谷	上原	○高橋基樹
豊島	大明	鶴見早月
荒川	尾久	由良隆

地区名	学校名	氏名
青梅	第七	□若林憲江
昭島	拝島第三	阪田幸子
町田	鶴川第二	齋藤乃太
国立	国立八小	一條浩美
西東京	上向台	五十嵐明子

◎全体世話人　○分科会世話人　□分科会副世話人

担当　東京都教職員研修センター指導主事　對馬伸一郎

研究主題　　未来を拓く道徳授業の創造

目　　次

◇　研究主題について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

◇　研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅰ体験をもとに自分自身を振り返り、よりよく生きようとする心を育てる指導の工夫
・・・・・・・3

1　分科会主題設定の理由
2　実態調査・考察
3　研究の構想
4　研究主題にせまる指導の工夫
5　実践事例

Ⅱ日常活動の中での体験を生かして、互いを認め合える心を育てる指導の工夫
・・・・・・・・・10

1　分科会主題設定の理由
2　実態調査・分析
3　研究構想図・指導の工夫
4　実践事例・考察

Ⅲ集団や社会に進んでかかわろうとする心を育てる指導の工夫・・・・・・・・・・・17

1　分科会主題設定の理由
2　実態調査
3　研究構想図・指導の工夫
4　実践事例・考察

◇　研究の成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24

研究主題設定の理由

未来を拓く道徳授業の創造

◇研究主題について

２１世紀が始まった。子どもたちには、未来に夢や希望をもち、主体的に様々な課題に立ち向かい、解決することによってよりよい社会を築く人間に成長し、この新世紀を担ってほしいと私たちは願っている。しかし、子どもたちを取りまく環境には、今日なお克服すべき課題が多い。

戦後我が国は、物の豊かさを追求しすぎ心の豊かさがなおざりにされてきた。急速な都市化に伴う核家族化・少子化に加え、大人の価値観の多様化が拍車をかけ、子どもたちには様々な体験が不足し、人とのかかわりも確実に少なくなっている。そのため、家庭や地域の教育力が低下し自己中心的で他者への思いやりを欠いた、良好な人間関係を築くことのできない子どもが増えている。ここ数年、少年による痛ましい事件が次々と報道されるたびに、事態の深刻さを感じずにはいられない。

このような現状をふまえ、学校教育に携わる私たちが取り組むべきことは、心の教育の充実ではないだろうか。そして今回私たちは、道徳の時間を中心としてこのことを研究する機会に恵まれた。

研究主題に掲げた「未来を拓く」には、子どもたち一人一人が未来に夢や希望をもち、常に前向きな姿勢で自主的に考え判断し実行することにより、自らの人生や新しい社会を切り拓いていくとともに、そのことを次の世代へ受け継いでほしいという願いが込められている。

その実現に向かって私たちは、子どもたちが主体的に活動できる様々な体験や人とのかかわり合いを通して、他者理解を深め、さらには自己を見つめながら、道徳的価値の自覚を深める手立てを考えた。これらは学校教育全体で行われるべきことであるが、その核となる「道徳の時間」をもとにして培われた道徳的価値を自分のものとして発展させていく必要がある。

また、子どもたちだけが自己を見つめ直すのではなく、私たち教師も自ら子どもたちと共に考え、悩み、学んでいく姿勢で授業に臨むことにより、「道徳授業の創造」は成されるものと確信している。

以上の理由から、本研究主題「未来を拓く道徳授業の創造」を設定した。さらに、以下のように各分科会の主題を設定し、研究主題に迫ることとした。

第1分科会　体験をもとに自分自身を振り返り、よりよく生きようとする心を育てる指導の工夫

第2分科会　日常活動の中での体験を生かして、互いを認め合える心を育てる指導の工夫

第3分科会　集団や社会に進んでかかわろうとする心を育てる指導の工夫

◇研究の概要

研究主題　未来を拓く道徳授業の創造

第１分科会	第２分科会	第３分科会
目指す児童像		
自らの存在や生き方を見つめ自分自身を大切にし、前向きにたくましく生きようとする子ども	互いのよさや違いを認め合おうとする子ども	集団や社会に対して愛情や愛着をもち、自ら進んでかかわろうとする子ども
分科会主題		
体験をもとに自分自身を振り返り、よりよく生きようとする心を育てる指導の工夫	日常活動の中での体験を生かして、互いを認め合える心を育てる指導の工夫	集団や社会に進んでかかわろうとする心を育てる指導の工夫
仮説		
①意図的、計画的な共通体験を生かし、振り返りの場を工夫することにより、児童は道徳的価値を深めることができる。 ②自分自身のこととしてとらえられる心に響く指導の工夫をすれば、自らの存在や生き方を見つめていくことができる。	日常の活動を授業に生かすことで、主体的に自己を振り返るようになり、互いのよさや違いを認め合う心を育てることができる。	集団や社会に対して愛情や愛着をもち、自分がそこにどうかかわっているかを見つめ直すような道徳の時間の工夫をすれば、よりよい集団づくりや社会づくりに積極的にかかわろうとする心情を培うことができる。
指導の工夫		
◎体験を生かす指導の工夫 ・家庭や地域の力を生かす工夫 ・多様な価値観を認め振り返りの場を重視する ・心に響く発問の工夫	◎日常の様々な活動の中での体験を生かす指導の工夫 ・自己の振り返りを促すための発問の工夫 ・日常活動の中での体験を想起させる工夫	・自作写真、資料の開発 ・体験活動を生かす工夫 ・家庭・地域と連携した展開の工夫 ・ゲストティーチャーの活用 ・価値の自覚を深める発問の工夫

検証授業

総合的な評価（指導計画・指導方法・児童の変容）

Ⅰ 1. 分科会主題設定の理由

（第１分科会）

現代の教育的課題

▲ 生活、社会、自然体験の不足
▲ 直接体験の不足

豊かな体験活動を保障

▲ よりよく
生きようとする力の低下

体験活動を通して
豊かな人間性や
社会性を育成

児童の実態

○ 人や自然とのかかわり
自分への気付き　など
体験を通して多くを学んでいる。

▲ 「どろあそび」「虫とり」など
素朴な体験を避ける傾向にある。

教師の願い

◎ 心の内面に響く体験を保障したい。
日常的体験 ⟺ 意図的 / 計画的 体験

◎ 体験を振り返りながら、
自分を振り返り、見つめさせ、
内面に実感させたい。（道徳の時間）

◎ 振り返りの力を付けていきながら、
自分自身を見つめる力を付けたい。

＊ 意図的計画的な共通体験をすると、様々な環境にある児童が多様な受け止め方をするはずである。その体験における児童個々の受け止め方を見取ることが大切である。その共通体験における児童の受け止め方を道徳の時間に生かすことによって、一人一人がねらいとする価値を自覚し、より自分自身を振り返るきっかけとなると考えた。

第１分科会主題

体験をもとに自分自身を振り返り、よりよく生きようとする心を育てる指導の工夫

2. アンケートをとってみました！

調査の目的

1. 様々な体験に対して、子どものもつ関心の傾向を明らかにする。
2. 親の願いに応じた授業づくりをする。
3. 親の願いと教師の思いとの重なり具合や開きを知る。

調査対象：
児童・保護者・教員

質問

子どもにどんな道徳性を身に付けてほしいですか。
下に挙げた中から身に付けてほしい順に3つまで選んでできれば理由もお教えください。

(1)基本的生活習慣　(2)善悪の判断　(3)自主性　(4)協力
(5)自律心　(6)社会の一員としての自覚　(7)勇気
(8)思いやり　(9)生命尊重　(10)愛国心　(11)節度節制

BEST3

1位　思いやり
2位　善悪の判断
3位　基本的生活習慣

保護者の期待

保護者のみなさんは、学校の道徳教育にどんなことを望んでいるのだろう？

思いやる心から勇気、協力などの気持ちに目覚めると思う。

総合的に身に付けてほしい。そうでないと人間的にバランスがとれないと思う。

すべての基本。人とのかかわりの最低の基準。（善悪の判断）

教師の思い

* 授業と実践を結び付けたいが、難しい。
* 道徳の時間は自分自身をじっくり見つめて考える時間にしたい。
* 友達同士のかかわりや感動体験、動植物の世話を授業に生かしたい。

☆　次にあげた活動中で、一番やってみたいものと一番やりたくないものを選んで、その理由を教えてください。

○ 山登り　○どろんこ遊び　○ 持久走　○ 虫とり　○小さい子の世話
○ 動植物の世話　○ 当番の仕事（給食やそうじ）　○ グループ活動
○ あとかたづけ　○ごみひろい

やってみたいBEST3

低学年	中学年	高学年
1位　山登り 2位　動植物の世話 3位　小さい子の世話	1位　山登り 2位　小さい子の世話 3位　虫とり	1位　山登り 2位　小さい子の世話 3位　動植物の世話

やりたくないBEST3

1位　どろんこ遊び 2位　持久走・虫とり 3位　山登り	1位　どろんこ遊び 2位　虫とり 3位　ごみひろい	1位　どろんこ遊び 2位　虫とり 3位　ごみひろい

児童の気持ち

どろんこ遊びは、汚れるし叱られるから嫌だ！

山登りや小さい子の世話をやったことがないからやってみたい！

山登りは気持ちいい。小さい子が大好き！

ごみは捨てた人が拾えばいいじゃない！

児童はどんな体験をしているのだろう？
どんな気持ちで取り組んでいるのだろうか？

授業にも取り上げられるのでは？

調査の考察

体験のフィーリングの快、不快によって行動を選択するという情緒の未発達が考えられる。

日常の体験の中に多少の困難（めんどくさい、はずかしい、汚い等）を感じることがあっても、あるがままの自分を見つめ、それを克服しようとしたり、よりよい自分を創造したりしていこうとする動機付けとなるような道徳の時間の指導を工夫する必要がある。

3. 研究の構想

課　題

児童の実態

教師の願い

第1分科会主題

体験をもとに自分自身を振り返り、よりよく生きようとする心を育てる指導の工夫

目指す児童像

自らの存在や
生き方を見つめ

自分自身を大切にし

前向きにたくましく
生きようとする子ども

研究の仮説

体　験　す　る

心に響く指導の工夫

振り返る
自らを見つめる

育つ
よりよく生きようとする心
たくましく生きる力

体　験　を　生　か　す

指導の工夫

家庭や地域の力を生かす

振　り　返　り　の　場

分　析

実証授業

考　察

4. 研究主題にせまる指導の工夫

体験を生かす

① 体験を生かす学習過程

共通体験を生かした道徳の時間にするために、また道徳の時間に学習したことを生かす体験の場を保障するために、道徳の時間を要とした一連の学習過程を考えていく。

（工夫の例）

- 特別活動、生活指導、日常活動等を関連させた総合単元的な道徳学習
- 総合的な学習の時間との関連
- 教科、学校行事における体験活動の活用

②体験の記録

子どもたちの体験をより有効に生かしていくためには、子どもたちが体験から何を学び何を感じ取っているのかを把握する必要がある。また子どもたちに体験記録を蓄積させておくことも大切である。子どもにとって道徳の時間の振り返りにおける大きなヒントとなるであろう。第一分科会では次のような方法を用いた。

児童・・・記録カードに体験の感想を記録する。

教師・・・観察法、聞き取り法、記録カードから子どもたちの実態をつかむ。

上記の方法で把握したことは授業展開、資料選定、指名を考える上での資料とする。

③体験を生かした授業展開

段階とそのねらい		体験を生かす工夫	
導入	ねらいとする価値や資料への方向付けを図る段階	事前に体験したこととの関連付けを工夫する。	実態調査 写真・絵・実物 ビデオ・体験記録
展開前段	ねらいとする価値を気付かせる段階	登場人物に同化させ、その考えや心情を自分のこととして見つめさせる	話し合いの工夫 役割演技・動作化 発問の工夫 沈黙の時間 ワークシート 自分へのメッセージ 意図的指名 体験記録
展開中段	ねらいとする価値を把握させる段階	登場人物と自分の心情を重ね合わせる。	
展開後段	資料から離れ、自分の生活を振り返らせ、価値の内面化を図る段階	今までの自分はどうであったか、自分を見つめさせる。	
終末	ねらいとする価値について整理し、まとめる段階	効果的なまとめをし、実践への意欲付けをする。	説話・格言・歌 ゲストティーチャー

＊資料や体験の内容や価値により、体験の生かし方、授業展開は異なる。

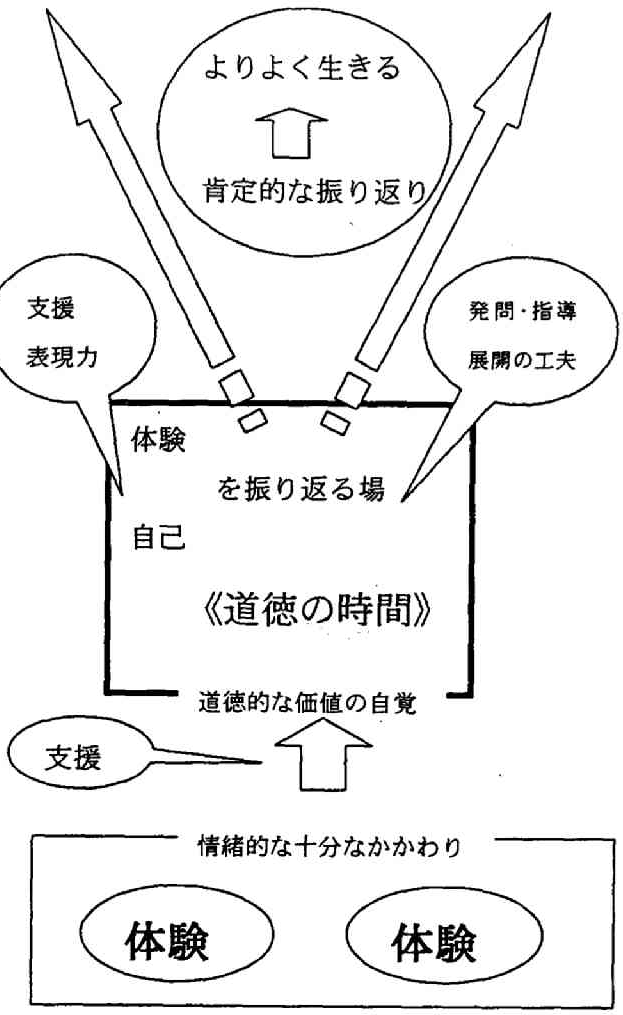
振り返りについて

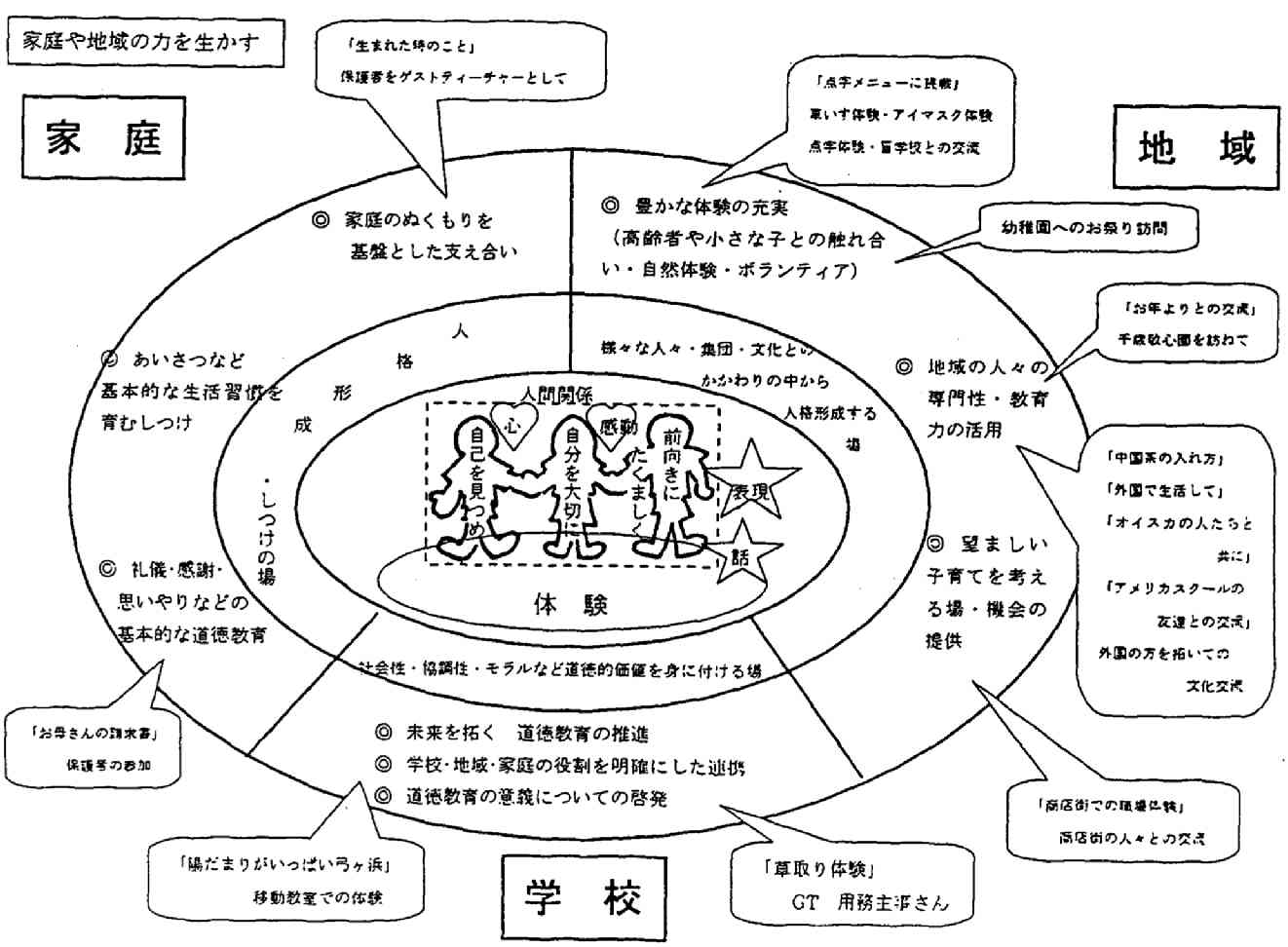
子どもは、教師が意図的に設定した体験に出会った時、多くのことに気付く。教師は、子どもの気付きを瞬時に受け止め、自己肯定感をもたせるような言葉かけをしたり、振り返りの視点をさりげなく与えたりして、支援をしていく。

道徳の時間の中では、展開中段において、子どもは体験した時の心情を振り返り、後段において自己の生き方や考え方を振り返る。この二つの振り返りがあるからこそ、道徳的価値の自覚を深めることができると考える。

さらに、子どもたちは、振り返ることによって体験したことの意義を見出し、振り返って良かったと思えるようになる。そして、体験へのかかわりを一層深めようとする中で主体的に、肯定的な振り返りができるようになると考える。

振り返りを大切にした活動、学習を積み重ねることによって、子どもたちは今後、困難なことに遭遇した時にも、自ら心の課題を乗り越えて、克服していこうとする『生きる力』を身に付けていくと考えた。





5. 実践事例(第6学年)

1．主題名　　「みんなのために」　高学年４－（４）　勤労

　資料名　　「ぼくの草取り体験」（文部科学省道徳教育推進指導資料４）

2．ねらい　　勤労の意義を理解し、集団のために進んで働こうとする心情を育てる。

3．展開

	学習活動	発問と児童の反応	指導の留意点
導入	1．事前に行った草取り作業の想起。	○草取り作業をした時、どんな気持ちをもちましたか。 ・大変だったけど頑張った。	・草取り作業時の写真提示。 ・体験記録ノートの活用。 ・発表された意見を板書。
展開前段	2．資料「草取り体験」を読み、とおるの気持ちについて話し合う。	○公園の草取りに行くことになった時とおるはどんなことを考えていたでしょう。 ・恥ずかしいから行きたくない。 ○とおるはどんなことを考えてさっきよりもていねいに草取りをしたでしょう。 ・みんなのためにやろう。 ○次の日、公園の横を通りかかったとおるは、どんな気持ちになったでしょう。 ・草取りをやってよかった。	・資料中のとおると自分を重ねながら、考えて読むように声をかける。 ・発表された意見を板書。 ・自分の気持ちととおるの気持ちを一目で対比できるように板書する。
展開中段	3．自分ととおるの気持ちを重ねる。	○自分ととおるの気持ちを比べてみよう。 ・終わった後の気持ちが似ている。 ・最初の気持ちだけ同じだ。	・資料中のとおるの作業前、作業中、作業後の心情の変化を把握させる。 ・体験記録ノートの活用。
展開後段	4．今までの自分を振り返る。	○今までの自分を振り返り、自分へのメッセージを書こう。 ・あなたは当番活動をかなり適当にやっているよ。もっとみんなのために丁寧にやろうよ。	・沈黙の時間。 ・自分へメッセージを書く。（ワークシート） ・意図的指名。
終末	5．本時のまとめ	ゲストティーチャーの話（本校主事）	・実践に向け意欲が高まる話

4．考察

・意図的共通体験をしたことで、児童は自分と登場人物を等身大に重ね合わせやすかった。

・展開中段を設けたことで、児童は自分自身を振り返りやすくなった。

・自分へのメッセージという形は、児童が自分を客観的に捉えることが少し難しかった。

Ⅱ　日常活動の中での体験を生かして、互いを認め合える心を育てる指導の工夫

（第２分科会）

１　分科会主題設定の理由

最近の子どもたちにかかわる実態として遊ぶ場所や時間の減少、一人遊びの増大、無気力・無関心がある。こういったことが人と人との触れ合いや交流の場や機会を減少させている。本来はそうした人と人との触れ合いの中でこそ身に付けられる望ましい自己の確立や人間関係を築く能力や態度が育ちにくい環境となっている。児童の自己中心的な態度、他者への無関心・無責任な態度、耐性の乏しさ等が今日指摘されていることは、それらのことと無関係ではない。

学級においても、自分のことに精一杯で人とかかわろうとしない子、人とかかわろうと思ってはいてもどうしたらいいかわからない子、自分とちがう考えの子を受け入れられない子にしばしば出会う。本分科会のアンケート調査の結果でも、自分が周囲に認められているという実感が薄いという実態がうかがえる。そのため、自分の思いや考えをもっていても、考えの違う子に自分の意見が言えず、周囲の人に対して自信をもって接することができていない様子が見られる。

人は他の人とのかかわり合いの中で生きている。そのかかわり合いが自分にとっても、他の人にとってもよりよいものになるためには、自分の言動に自信や責任をもつとともに、相手の立場に立って相手の感じていることや考えていることを知り、共感し、尊重していく態度が大切である。このことは温かい人間関係を築き、共に生きていくためには不可欠のことであり、自他の成長ばかりではなく学級集団としての成長にもつながる。

相手の立場に立って考えたり、自分の責任を自覚したりするためには、自分の行動について振り返らせ、その行動を価値付けすることが必要である。子どもたちは日々たくさんの活動をし、その中で様々な体験をしている。本分科会では、これらの活動の中に自分自身を振り返る機会を見い出し、道徳の時間に生かしていこうと考えた。

一つ一つの活動には道徳的価値がたくさん含まれている。しかし、子どもたちはそのことを認識しながら活動しているわけではない。また教師の受け止め方や見取り方も様々であり、子どもの感じているところとはすれ違うこともしばしばである。つまり、日々の活動は教師にとっても児童にとっても未整理な状態だといえる。そこで、それらの活動を整理し、道徳の授業に生かしていくことが、児童自身に振り返りを起こすきっかけになるだろう。児童は、授業の中で日常の活動を振り返ることによって、道徳授業で学んだことを自分のこととして認識できるようになる。これを積み重ねていくことで、児童は自分の行動に価値付けができるようになる。自分の行動に価値付けができれば自分を肯定的に理解し、他人の行動に対しても理解できるようになると考えた。

つまり、授業の中に日常の活動を生かすことが、自己の振り返りを促し、自己理解・他者理解につながり、そして、互いを認め合える心を育てると考えた。

以上のことを踏まえ、分科会の主題を「日常活動の中での体験を生かして、互いを認め合える心を育てる指導の工夫」と設定した。

なお、本分科会では、特に、児童の日常の活動を見取り生かすことで自己の振り返りを促すということに重点を置くことにした。

2　実態調査・分析

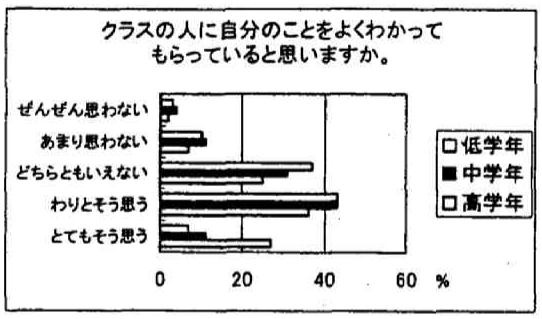
(1)　調査方法

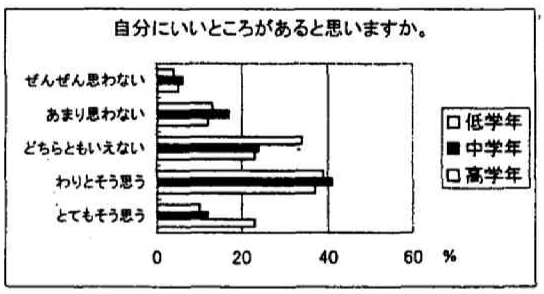
都内１０校の１～６学年児童　合計 1010 名に選択肢法による質問紙調査を行った。内容は、全学年共通とした。

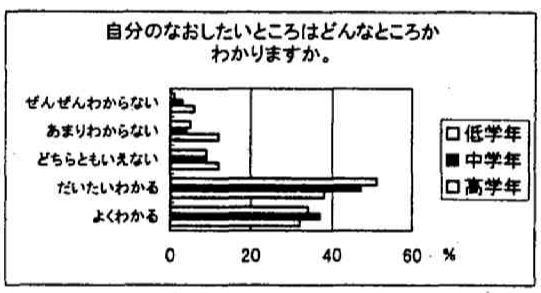
(2)　結果と考察

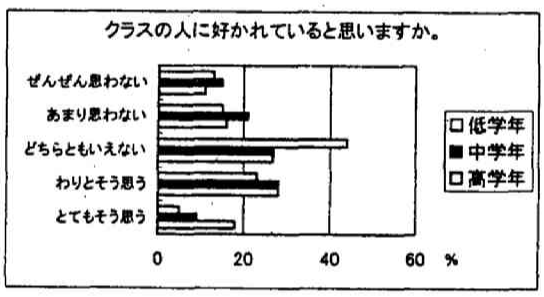
1　2　3　4　5

ぜんぜん思わない←　→とてもそう思う

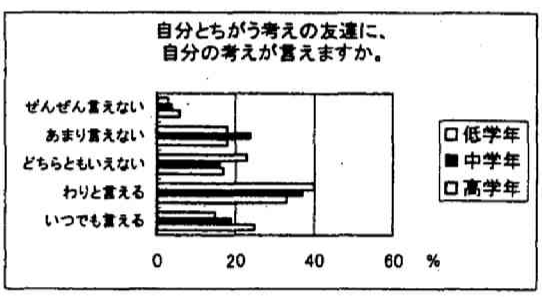


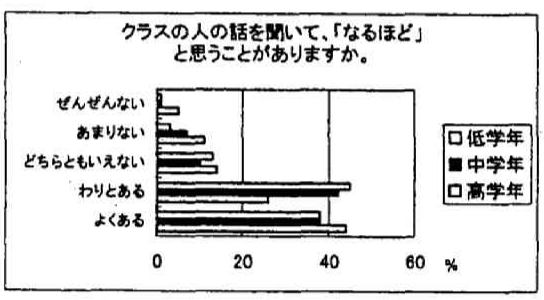


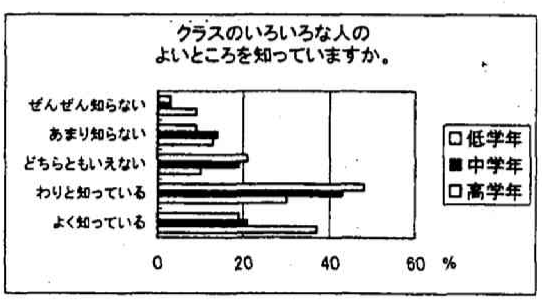


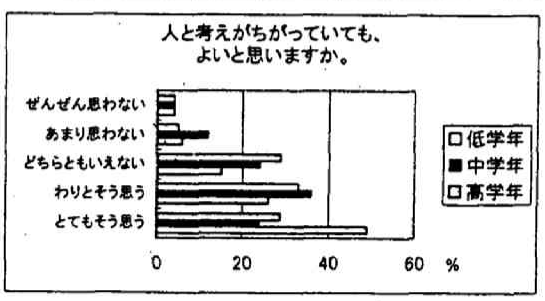


自分の短所は自覚しているが、長所に気付けずにいる子が多い。この傾向は、高学年になるにしたがって強くなる。さらに、周囲から認めてもらっているという実感が薄く、そのため、好かれていると自信をもっている子は少ない。









クラスの人の長所を認めたり、違う考えがあることを肯定的に受け止めたりしている。クラスの人に対し、共感的に理解をした経験をもっている子も多い。しかし、自分の思いを考えの違う相手に伝えることにおいては、消極的な傾向にある。

このような実態は、自分自身が周りに認められているという自信のなさによるものと思われる。そこで、まず子どもにいろいろな活動の中での体験を振り返らせ、その価値に気付かせ、自分を肯定的に理解できるようにすることが大切である。さらに、子どもは人とのかかわりを通して自分に自信をもったり、人との違いやよさを知ったりする。このことから、日常のかかわり合いの場を重視していこうと考えた。

3　研究構想図・指導の工夫

研究構想図

児童の日常活動

学校におけるすべての教育活動

・各教科　・特別活動　・総合的な学習の時間

・日常的な生活場面　・無意図的な体験　など

児童の実態

人とかかわろうとしない子

人とのかかわり方が分からない子

友達を受け入れられない子

目指す児童像

互いのよさや違いを認め合おうとする子ども

研究主題

日常活動の中での体験を生かして、互いを認め合える心を育てる指導の工夫

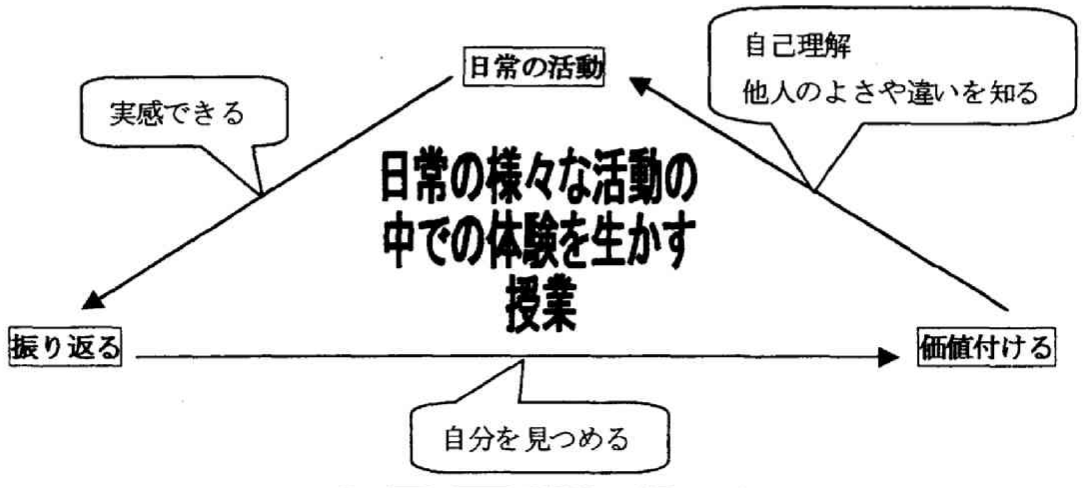
研究仮説

日常の活動を授業に生かすことで、主体的に自己を振り返るようになり、互いのよさや違いを認め合う心を育てることができる。

活動を見取る手だて

・日常観察　・会話　・朝の会、帰りの会　・アンケート　・日記　・作文　・学習ｶｰﾄﾞ

・学級新聞　・エンカウンター　・家庭との連携　・教職員間の情報交換　など



指導の工夫

（1）重点内容にかかわる日常活動

総合的な学習の時間での活動

- 農園作業（共同作業的な内容）
- 外国の方との出会い
- 障害がある方との交流

今までの、「かわいそう」という一面的なとらえ方ではなく、力強く生きる姿や明るく前向きな姿勢を知った。助け合おうという気持ちをもつことができた。

各教科

- 体育でのゲーム

サッカーでのゲーム中、A君はシュートをうったが得点できなかった。そして、そのままゲーム終了の笛がなりA君のチームは負けてしまった。B君は、敗因をA君のミスによるものだとA君にいいがかりをつけ、A君はB君のミスが敗因であるとして譲らなかった。その後、チームの話し合いによって、A君とB君は和解した。

- 他己紹介作文
- 音楽遊び
- 劇遊び
- 教え合い、認め合い

重点内容

低	2-(2) 思いやり・親切　2-(3) 友情・信頼　4-(3) 愛校心
中	2-(2) 思いやり・親切　2-(3) 友情・信頼　4-(3) 愛校心
高	1-(6) 個性伸長　2-(2) 思いやり・親切　2-(3) 友情・信頼　2-(4) 寛容 4-(1) 役割の自覚・責任　4-(3) 公正・公平　4-(6) 愛校心

特別活動

- 行事の取り組みの中での話し合い

林間学園のクラスの出し物を決める時に意見が対立した。話し合いではお互いに主張するのみで相手の考えを受け入れられなかった。練習を通して相手のことが受け入れられるようになった。

- 係活動
- 全校遠足
- 異学年の交流
- 席がえ
- グループ決め
- 自己紹介カード
- 構成的グループエンカウンター

日常的な生活

- 友達レター（いいとこみつけ）
- 朝の会
- 自己紹介カード
- 放課後遊び
- 帰りの会でのよかったことの発表
- 転入生

転入してきてすぐ体調を崩して一週間休んでしまった。久しぶりに登校したが友達になかなか声をかけられなかった。

- 清掃の時間

今日もA君とB君はぞうきんを投げてキャッチボールをしていた。Cさんはそうじが進まないので困っていたが注意するのが怖くてだまっていた。そこに通りがかったDさんは「だめでしょ」と二人にはっきり注意してくれた。

- 休み時間

一輪者に乗れなかったEさんが練習していたらFさんが毎日励ましてくれた。

互いのよさや違いを認め合おうとする子ども

（2）日常活動の中での体験の授業への生かし方

日常活動の中での体験を授業へ生かす場面として

○導入に生かす。
○体験を生かした自作資料を作る。
○体験が生きるような資料を選ぶ。
○展開前段の発問に生かす。
○展開後段に生かす。
○終末の説話などに生かす。

焦点化

展開の後段に日常活動での体験を生かし、自己の振り返りを促すことに重点を置き研究を進めた。

授業を組み立てるために

本時にかかわる日常活動	○ねらいにかかわる日常活動を考える。 例）友情・信頼では ・音楽遊び　・劇遊び　・勉強の教え合い ・友達の長所さがし　・休み時間の出来事 ・転入生とのかかわり
本時に生かす日常活動での体験	○学習のねらいと子どもの実態を考えて、本時にかかわる日常活動の中から、授業に生かす体験を絞り込む。 例）友情・信頼の授業で「友達と仲良くしようとする心情を育てる」というねらいを考えいくつかの日常活動から、本時としては音楽遊びを取り上げることにした。
展開後段における生かし方	○日常活動の中での体験を想起させる。 ・学習カードを読み返したり、見せ合ったりさせる。 ・学習カードや学級日誌を教師が読み聞かせる。 ・教師が見取った様子を話して聞かせる。 ・日常活動の写真を見せる。 ・ねらいにかかわる教室掲示に注目させる。 ・アンケートの結果を発表する。 ◎発問の工夫 ねらいとする価値と児童の日常活動が結びつくような発問を工夫する。

4　実践事例・考察

（1）主題名　ともだちっていいな　　2－（3）　信頼・友情

資料名　「ひろったビスケット」

（2）ねらい　友達と仲良くしようとする心情を育てる。

（3）指導の工夫

ねらいにかかわる日常活動を考える。

本時にかかわる日常活動

○ 勉強の教え合い　○ 「おおきなかぶ」の劇遊び　○ 音楽遊び

○ 今日のよかったこと、ありがとう（帰りの会）

○ 仲間はずれにしたこと（休み時間）　○ 体育の時間「おもしろリレー」

学習のねらいと児童の実態を考えて、本時にかかわる日常活動の中から授業に生かす体験を絞り込む。

本時に生かす日常活動での体験

○ 帰りの会で常時行っている「今日のよかったこと、ありがとう」活動。

○ 休み時間、なかなか友だちと遊べない子のために、音楽の時間に「ハンカチ落とし」の音楽ゲームを行ったこと。

展開における生かし方

＜展開後段＞

・ねらいとする価値と児童の日常活動が結び付くような発問を工夫する。

☆1　帰りの会で行っている「今日のよかったこと、ありがとう」を想起できるように「ありがとう」という言葉を使った。

・教師が日常活動を想起させるような話をする。

☆2　休み時間、なかなか友だちと遊べない子のために、音楽の時間に「ハンカチ落とし」の音楽ゲームを行った。とても楽しそうに遊んでいた。その子の話を紹介することで友達とのかかわりあいのよさについて考えられるようにする。

・フラッシュカードを使っていろいろな場面について考えさせる。

☆3「休み時間」「学校を休んだとき」「給食の時間」「そうじの時間」などのカードを用意しておき、子どもたちの意見で出なかった場面について想起させ考える場面を広げる。

＜終末＞

・日常活動の写真を見せる。

☆4　みんなが仲良く遊んでいる写真を提示し、仲良くしたいという気持ちをもたせる。

友達のよさに気付き、発表し合うことで自分のしてきたことに価値付けができるであろう。

（4） 展開

	学習活動	主な発問と予想される児童の反応	指導上の留意点
導入	1　歌を聞いて、資料への興味をもつ。	○みんなの好きなおやつは何ですか。 ・ガム　　・グミ ○教師が「ふしぎなポケット」を歌うのを聞き、楽しむ。	・歌いながらビスケットを提示して、楽しい雰囲気を作り出す。 ・資料への導入をはかる。
展開前段	2　資料「ひろったビスケット」を視聴し、登場人物の気持ちについて話し合う。	①「こっそり二人で食べようよ。」とたろうくんに言われたとき、はなちゃんはどんなことを思ったでしょう。 ・そうだね。二人で食べちゃおう。 ・みんなにも分けてあげたいな。 ②泣いているはなちゃんはどんなことを思っているでしょう。 ・ごめんね、みんな。わたしたちは二人で食べちゃおうとおもったのに・・・。 ・みんなやさしいね。ありがとう。	・資料は場面絵で提示する。 ・はなちゃんの気持ちになって、迷う気持ちを考えさせる。 ・場面絵を提示し、はなちゃんの気持ちを考えやすくする。 ・ほかのありたちが、自分たちのことを心配してくれたことに気付かせる。
展開後段	3　今までの自分を振り返る。	③友達に「ありがとう」という気持ちになったのはどんなときでしたか。 ・勉強を教えてくれた。 ・教科書を見せてくれた。 ○こんな時はどうでしたか。 （フラッシュカードを使う。） ・牛乳をこぼしたときふいてくれた。 ・お休みしたとき心配してくれた。 ○先生が見ていてとてもうれしかったことの話を聞く。（ハンカチ落としの話を聞く。） ○友達やみんなと一緒にできてよかった、楽しかったと思ったのはどんなときですか。 ・休み時間、みんなで遊んだとき ・おもしろリレーをやったとき	☆1　発問の工夫 ☆3　フラッシュカードは意見が偏ってしまった場合、広がりをもたせるときに使う。フラッシュカードを活用し、今まで出なかった場面を想起させる。 （意見が偏らず広くから出てきた場合はこの発問はしない。） ☆2　日常活動を想起させる話 （意見をより深めるため）
終末	4　教師の話を聞く。	○クラスの友達と仲良くしている写真を見る。 （ドッヂボールをしている写真など）	☆4　日常活動の写真 ・仲良くしている写真を見せることで、友達と仲良くしたいという気持ちをもたせる。

（5）考察

・日常活動である「今日のよかったことありがとう」を生かした発問は、自己の振り返りを促すのに効果的であった。

・フラッシュカードを提示したことは、児童に様々な場面を想起させるのに有効であった。

・様々な手だてを通し日常活動を見取ることで、児童の発言に対し効果的な働きかけができた。

・展開後段に意見をより深めるための発問を設定した。その場合、より本時のねらいに迫るものとなるよう発問を吟味する必要がある。

Ⅲ　集団や社会に進んでかかわろうとする心を育てる指導の工夫（第３分科会）

１　分科会主題設定の理由

21世紀を迎えた今日、子どもたちを取り巻く環境は、大きな変化を遂げてきた。そして、その中で育ってきた子どもたちの姿も大きく変化してきている。

不登校、集団不適応、いわゆる学級崩壊などといった問題行動は、子どもたちの自立の遅れや情緒の未発達、社会性の欠如、耐性や自己抑制力の低下などが原因となって起こっている。こうした問題の背景には、知育偏重の教育や、家庭の教育力の低下が考えられる。また、保護者の価値観の変化や核家族化・少子化等により他の人とかかわる場面が少なくなったこと等が影響して、家庭と地域のつながりも薄れてきた。その結果、家庭だけでなく地域における教育力も低下してきているのである。

こうした現状をとらえ、子どもたちが未来に夢や希望をもち、主体的に逞しく生きていくためには、集団や社会と積極的にかかわることが必要であると本分科会では考えた。つまり、子どもたちが、集団や社会に積極的にかかわり、認められる中で、「その中の一員としての自分」を自覚し、さらには「ただ一人の大切な自分」を実感していくことができるのである。また、こうした自己肯定感をもつことで、自分自身や集団や社会に対して、より愛情や愛着をもち、自信をもってかかわっていこうとするであろう。このとき、子どもたちの生きる力は高まっているのではないかと私たちは考えた。

そこで、本分科会は、研究主題として「集団や社会に進んでかかわろうとする心を育てる指導の工夫」を掲げ、研究を進めていくことにした。

現在の子どもが抱える問題を解決していくために、学校は「心の教育」のより一層の充実を図っていかなければならない。しかし、子どもの育成は学校だけでできることではない。子どもは『家庭で育ち、学校で学び、地域で伸びる』ものである。家庭や地域の教育力の低下が指摘されている今日こそ、今以上に学校を開き、家庭や地域と連携した子どもの育成を推進していかなければならない。東京都が推進する『心の東京革命』の主旨もそこにある。

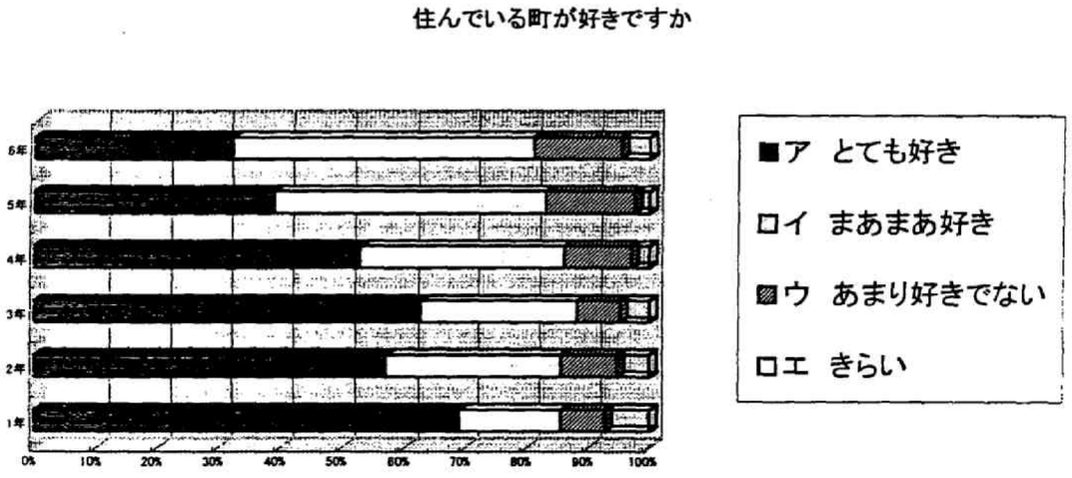
学校や家庭、地域を題材とした資料を取り入れたり、子どもたちや地域にかかわりのある人々をゲストティーチャーとして招いたりした道徳の授業を進めていく中で、人とのかかわりの大切さに気付かせ、学校や家庭、地域を愛する心を育んでいく。そして、他者とのかかわりの中で自らを見つめ直し、よりよい集団作りや社会作りに積極的にかかわろうとする心情を培っていきたい。

２　実態調査

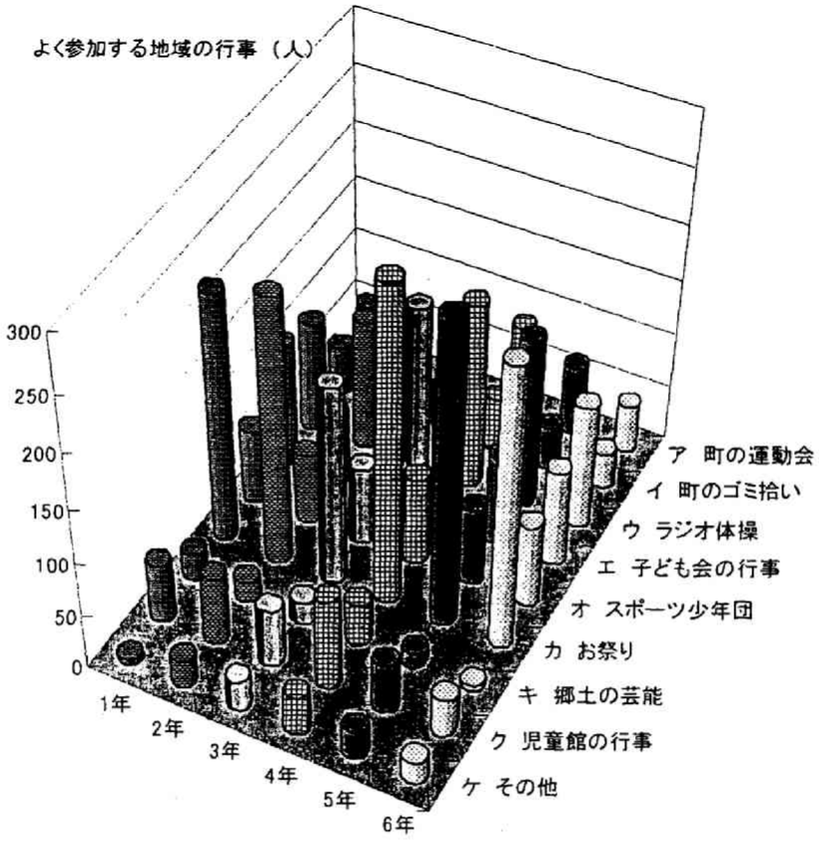
都内区立小学校６校児童２４８６名（全学年）・保護者３６１名　　質問紙で調査を実施

① 児童の実態

○自分の住んでいる町が好きか（グラフ１）



○自分の住んでいる町の地域行事や活動に参加しているか（グラフ２）



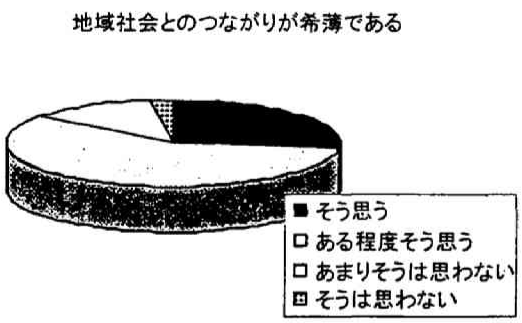
② 保護者の実態

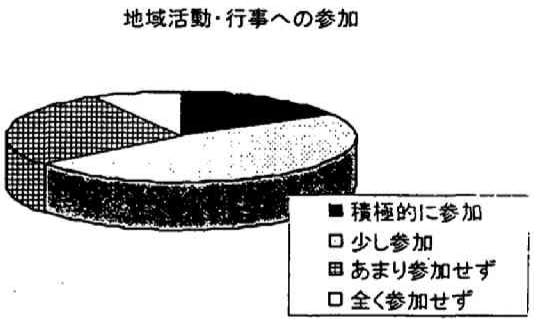
○子どもたちと地域社会とのつながりが希薄になっていることをどう思っているか。

（グラフ３）

○住んでいる地域の行事や活動に積極的に参加しているか。

（グラフ４）





◎学校・家庭・地域社会が連携して子どもを育てていくためにどうしたらよいか。（記述回答）

家庭

- 親自身の積極的な地域行事への参加する。
- 我が子以外の地域の子に関心をもち、他人の子も一緒に育てる。
- 基本的しつけをしっかりする。

学校

- 学校が中心となり、家庭・地域を含む三者が結びつく行事を主催する。
- 地域行事への参加。

地域

- 行事に幅広い年齢層の人々が参加する。
- 適切な指導者を設ける。

③結果と考察

児童は、予想したよりも現在住んでいる地域に満足しているようである。ほとんどの児童は、地域の行事や活動に参加している。一番多いのは、お祭りである。また、低学年では、児童館の行事への参加が多い。これらは、地域の人とかかわりながら活動するという要素の比較的少ないものである。これらの結果から、現在住んでいる地域に満足しながらも、自分からは、積極的に地域とかかわることの少ない児童の実態が浮かび上がってきた。

保護者は、児童と地域とのかかわりが希薄になっていると感じている。また、児童の健全な育成には、地域の力が必要であり、地域とかかわることが大切と考えていることが調査から伺えた。しかし、保護者自身が、地域の行事や活動に積極的に参加しているとは言い難く、また、現在の状況を改善する方策として、「地域の人に、みんなが参加できる行事を計画して欲しい。」「学校で何か企画して欲しい。」「地域の人がもっと子どもに声をかけて欲しい。」というように、自らが積極的にかかわろうとするのではなく、『誰かに何かをして欲しい』という他力本願的な意識が見られた。

3 研究構想図・指導の工夫

分科会主題

集団や社会に進んでかかわろうとする心を育てる指導の工夫

指導の工夫

事前指導	本時に関すること	事後指導
☆自分たちが生活している地域をよく知るために、実態に即した体験活動を計画する。 ①地域清掃 ②古くから地域で生活している方からお話を聞く。 ③地域行事への参加 ☆自由に発言できる学級づくり ☆多様な学習形態の経験	［資料選択の工夫］ 発達段階　実態　心に響く 実体験　　自作資料 ［展開の工夫］ 体験的活動　心情に訴える学習材　人材の活用　家庭との情報交換 ［発問の工夫］ 多様な意見を引き出す 互いのよさや、違いを引き出す　切り返しや揺さぶり	☆他教科　他の教育活動との関連付け ☆家庭　学校　地域への積極的な企画・参加

4　実践事例(第６学年)・考察

（1）　主題名　　きれいな町に　　4－(7)郷土愛

　　資料名　　「この町がすきだから」(自作　写真教材)

（2）　ねらい

　地域社会の一員としての役割を自覚し、みんなで協力し合い、郷土のために活動していこうとする気持ちを育てる。

（3）　研究主題との関連

①資料

対照的な二つの町の様子を視覚的にとらえるため、数枚の写真を資料とする。

また、写真を段階的に提示することによって効果をねらう。

②資料への共感

厳しい罰則によって美しく保たれているシンガポールの街並み、ごみの散らかった身近な町。

見慣れた景色を含む写真を比べる中で、子どもたちに葛藤を起こす。

ゲストティーチャーも地域の方で、子どもたちには身近な存在である。

郷土愛についての資料は、古くから伝わる伝統芸能など、その地域だけの、独自の特色ある活動を生かしたものが多い。本授業は郷土愛を取り上げているが、どんな地域でも、誰でも、いつでも、実施できる資料である。

③体験的学習を生かす

本校では総合的学習の時間で、地域の中のボランティア的活動を体験している。この体験の中で、自分にできることの発見、感謝される喜び、地域を愛する気持ちなど、さまざまな思いを得てきた。それらの思いが本時と重なり合うことにより、児童の意識がより高まるのではないかと考えた。事後の活動として、地域のためにできることを考えてみる。

④ゲストティーチャー

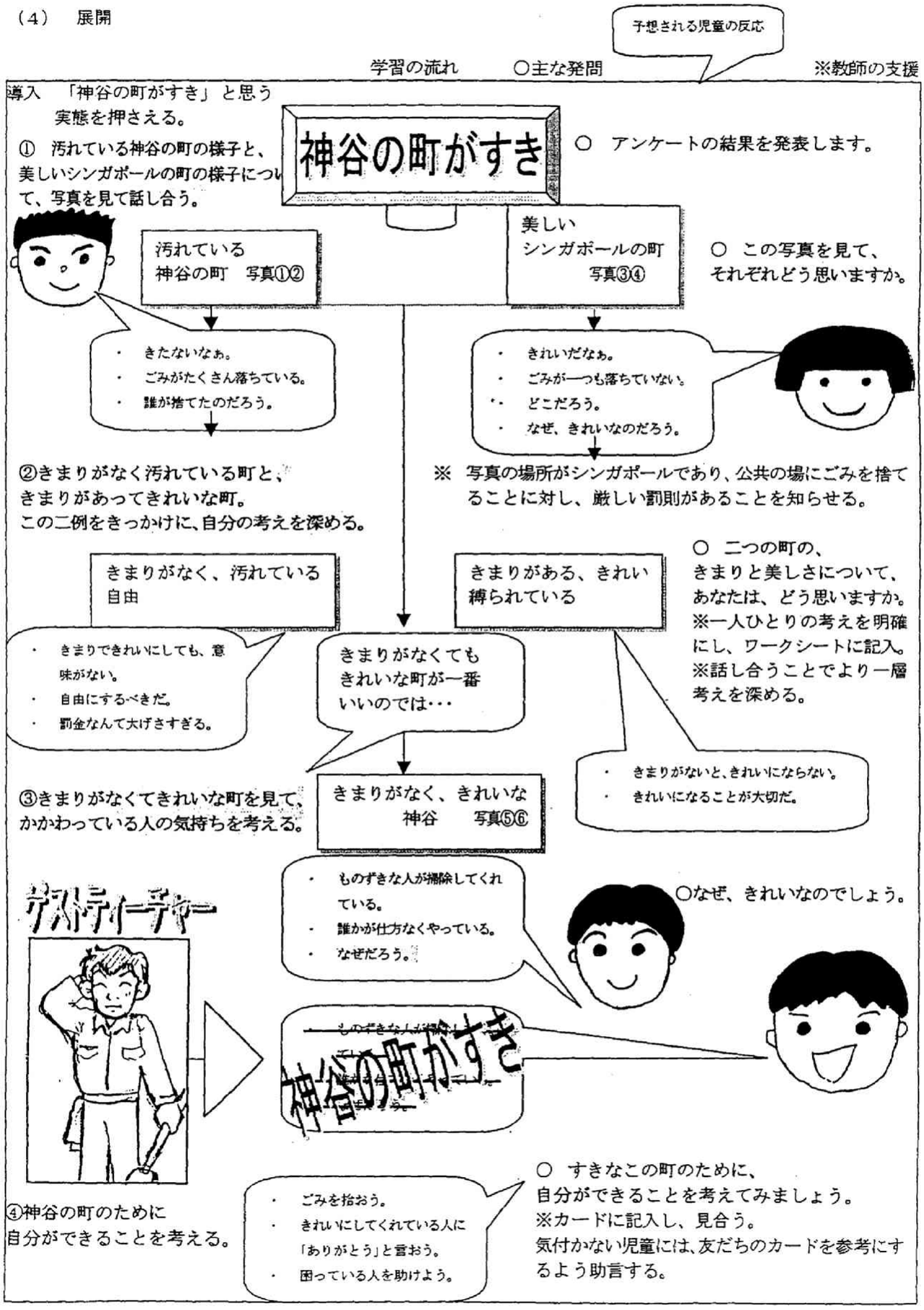
本時では、地域のリサイクルリーダーである方をゲストティーチャーに迎える。授業の中盤で、『この町がすきだから』活動している、という熱い思いを語っていただく。ゲストティーチャーの生き方にふれることにより、道徳的な価値の自覚が深まることを期待する。

⑤展開の工夫

本時では、写真資料を段階的に提示する。これは自分の考えを明確にさせるためである。また、ゲストティーチャーも終末ではなく、中盤で登場していただく。これは道徳的な価値の自覚の深まりをねらってのことである。

終末では、「地域のためにどんなことができるか」を、短冊に書いて貼る。友達の多様な考えを知り、「あのようなことなら自分にもできそうだ」「自分もこういうことならやっていたな」「このような小さなことでも地域の役に立っていたのか」･･･と気付かせ、今後意欲をもって取り組むようにさせる。

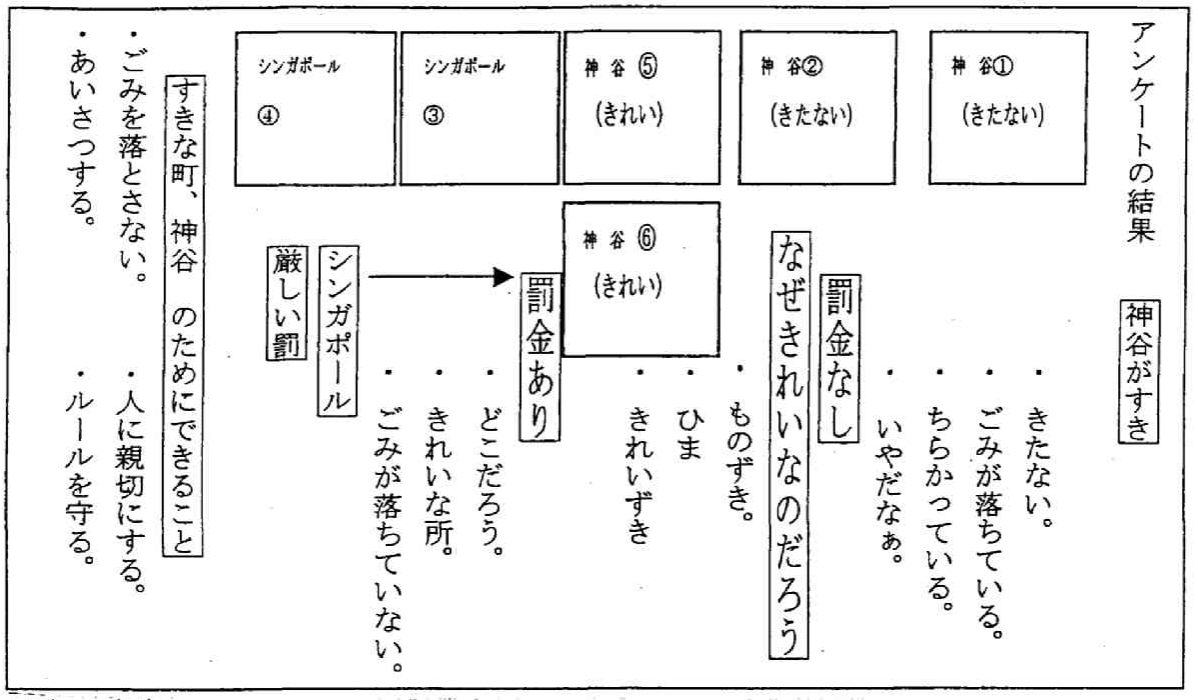
（4） 展開


予想される児童の反応
学習の流れ
○主な発問
※教師の支援
導入 「神谷の町がすき」と思う実態を押さえる。
① 汚れている神谷の町の様子と、美しいシンガポールの町の様子について、写真を見て話し合う。
神谷の町がすき
○ アンケートの結果を発表します。
汚れている
神谷の町 写真①②
美しい
シンガポールの町
写真③④
○ この写真を見て、それぞれどう思いますか。
・きたないなぁ。
・ごみがたくさん落ちている。
・誰が捨てたのだろう。
・きれいだなぁ。
・ごみが一つも落ちていない。
・どこだろう。
・なぜ、きれいなのだろう。
②きまりがなく汚れている町と、きまりがあってきれいな町。
この二例をきっかけに、自分の考えを深める。
※ 写真の場所がシンガポールであり、公共の場にごみを捨てることに対し、厳しい罰則があることを知らせる。
きまりがなく、汚れている
自由
きまりがある、きれい
縛られている
○ 二つの町の、きまりと美しさについて、あなたは、どう思いますか。
※一人ひとりの考えを明確にし、ワークシートに記入。
※話し合うことでより一層考えを深める。
・きまりできれいにしても、意味がない。
・自由にするべきだ。
・罰金なんて大げさすぎる。
きまりがなくても
きれいな町が一番
いいのでは・・・
・きまりがないと、きれいにならない。
・きれいになることが大切だ。
③きまりがなくてきれいな町を見て、かかわっている人の気持ちを考える。
きまりがなく、きれいな
神谷 写真⑤⑥
・ものずきな人が掃除してくれている。
・誰かが仕方なくやっている。
・なぜだろう。
○なぜ、きれいなのでしょう。
ゲストティーチャー
神谷の町がすき
④神谷の町のために
自分ができることを考える。
・ごみを拾おう。
・きれいにしてくれている人に「ありがとう」と言おう。
・困っている人を助けよう。
○ すきなこの町のために、自分ができることを考えてみましょう。
※カードに記入し、見合う。
気付かない児童には、友だちのカードを参考にするよう助言する。

（5）　評価

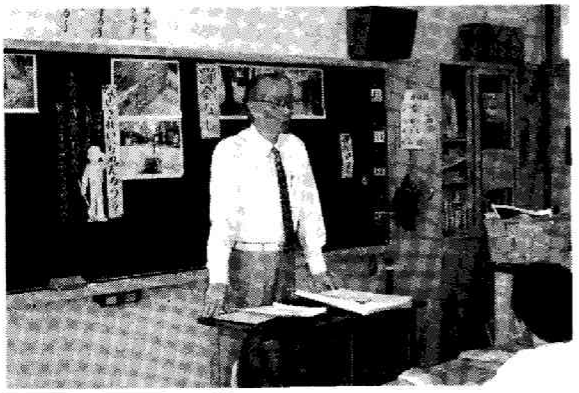
・　自分たちの町のためにできる活動や行いを考えることができたか。

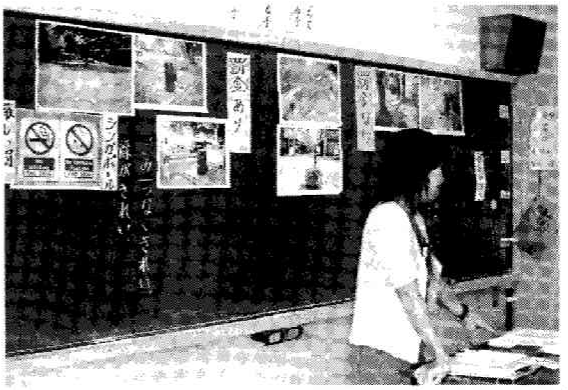
（6）　板書計画



（7）　考察

・写真だけで話し合いができた。多くの地域で用意でき、児童にとって身近に考えることのできる有効な資料であった。
・写真資料の提示が段階的になされていたことが効果的であった。
・時間をかけ、自分の立場を明確化することで、話し合いが活発に行なわれた。
・終末、自分に振り返って考える場面で、指示を明確にするとより深まった。
・カードに一人一人の考えを書かせる場面で、意欲の高まりが感じられた。
・総合的活動の時間との関連がうまく位置付けられていた。
・ゲストティーチャーの登場場面が効果的であった。
・本時の展開をフローチャート式にした点は学習の流れと発問を構造的にとらえることに有効であった。





◇研究の成果と今後の課題

研究主題「未来を拓く道徳授業の創造」を目指して、分科会ごとに具体的な授業実践を通して研究を進めてきた。その結果、各分科会ごとに次の点が明らかになった。

1　研究の成果

○第１分科会

・「意図的共通体験の場」を設定し、子どもが体験をどのようにとらえているかを体験記録カードや道徳ノートを使い把握することにより、授業を通して道徳的価値の内面的自覚が深められることがわかった。

・展開中段を設定し、体験での心情と資料中の主人公の心情を重ね合わせることで、児童がより自分のこととして、とらえ考えることができ、ねらいとする価値を自覚することができた。

○第２分科会

・日常活動の中での様々な体験を生かすことで、児童が自分自身を振り返りやすくなった。

・児童が自分自身を振り返ることで、道徳的価値について自分のこととしてより実感をともなって認識できるようになった。

・日常の活動を道徳的な視点で見取ることで、児童一人一人への効果的な働きかけができるようになった。

○第３分科会

・実態調査を踏まえ、自分たちの住み慣れた地域をテーマに身近で現実的な写真のみの資料を開発し活発な話し合いができた。

・総合的な学習の時間をはじめとする合科的指導と関連を図ることにより、道徳的価値の内面的自覚がより深められた。ゲストティーチャーも効果的であった。

2　今後の課題

○第１分科会

・意図的な共通体験を生かせる資料を探すことは難しかったが、共通体験を生かし、道徳の時間だけでなく、各教科、特別活動、総合的な学習の時間と相互の関連を図りながら、道徳の総合単元化の工夫をしていきたい。

○第２分科会

・児童が深く自分自身を見つめることができるように、日常の様々な活動をどのように見取り、どのように授業に生かしていくかをより吟味していく必要がある。

○第３分科会

・道徳的価値の自覚を深めるために、展開後段では具体的な方法論ではなくて、自分自身のかかわり方を振り返ることができるような手立てを工夫していく必要がある。

平成13年度

教育研究員名簿

第１分科会

地区名	学校名	氏名
世田谷	給田	○坂江律子
中野	中野神明	□武田淳
杉並	和泉	秋山峰代
練馬	関町北	宮川正子
武蔵野	第三	松井彩
多摩	東落合	筒井泰行

第３分科会

地区名	学校名	氏名
中央	有馬	□川瀬光子
江東	枝川	◎長町正弘
北	神谷	押見尚美
足立	桜花	古谷眞理子
葛飾	道上	世取山哲哉
江戸川	新田	小島倫子

第２分科会

地区名	学校名	氏名
大田	東調布一	高野寿子
大田	道塚	青木文理
渋谷	上原	○高橋基樹
豊島	大明	鶴見早月
荒川	尾久	由良隆

地区名	学校名	氏名
青梅	第七	□若林憲江
昭島	拝島第三	阪田幸子
町田	鶴川第二	齋藤乃太
国立	国立八小	一條浩美
西東京	上向台	五十嵐明子

◎全体世話人　○分科会世話人　□分科会副世話人

担当　東京都教職員研修センター指導主事　對馬伸一郎

平成１３年度教育研究員研究報告書

東京都教育委員会印刷物登録
平成１３年度　　第４１号

平成１４年１月２３日

編集・発行　　東京都教職員研修センター
所在地　　東京都目黒区目黒１－１－１４
電話番号　０３－５４３４－１９７６

印刷会社名　　株式会社　ドゥ・アーバン